

1

そめつけ ぶ どう も ようつつ がた はい  
染付 葡萄模様筒形杯

大正4年(1915)頃 8703

富本憲吉は大正4年(1915)に自宅近くの畑地に2房の本窯(槌屋窯)を造って制作を始める。筒形杯の形態は染焼のコップの形態と同様であり、葡萄模様も木版やエッチング、染焼の葡萄模様と近似した表現を用いている。

2

そめつけ はやし とり も ようはっかく ゆ のみ  
染付 林に鳥模様八角湯呑

大正11年(1922)銘 8714

3

そめつけ ひょうたん も ようつつ がた ゆ のみ  
染付 瓢箪模様筒形湯呑

大正7年(1918)銘 8705

4

そめつけ じゅ じ ばいじゅ も よう  
染付 寿字梅樹模様  
つつ がた ゆ のみ  
筒形湯呑

大正14年(1925) 8725

5

うす る り じ せんぼり  
薄瑠璃地線彫  
ふと い も よう ゆ のみ  
太藺模様湯呑

大正9年(1920)銘 8709

6

つち やき てつびょうどうさい  
土焼鉄描銅彩  
しゃくやく も よう ふた つき つぽ  
芍薬模様蓋付壺

昭和5年(1930)銘 8756

7

そめつけ たで も ようさんしょうがたむこうづけ  
染付 蓼模様山椒形向付

波佐見・福幸窯  
昭和5年(1930) 8762

8

そめつけ くさ は も ようはっかくさら  
染付 草の葉模様八角皿

大正9年(1920)銘 8710

9

うす る り じ せんぼり  
薄瑠璃地線彫  
の ぶ どう も よう えん けいかざりいた  
野葡萄模様円形飾板

大正11年(1922)銘 8717

富本憲吉は、部屋などの装飾品として使われる飾板を初期から制作している。円形に形作った板にピンボウツルをデザイン化した「野葡萄」と羽虫の模様を線刻し、コバルトを薄く塗って透明釉を掛けて焼き上げている。

10

はく じ ようこく くさ は も ようさら  
白磁陽刻 草の葉模様皿

大正8年(1919)銘 8760

11

うす る り じ せんぼり  
薄瑠璃地線彫  
あざみ も よう はっかくさら  
薊模様八角皿

大正9年(1920)銘 8707

八角の皿の内面にコバルトをうすく刷毛塗りし、直立した花をつけるチョウセンアザミをやや写実的なタッチで線刻する。ヘラで刻んだ箇所は白く残り、薄瑠璃の地とのバランスは端正な色合いを見せて、絶妙な趣をもつ。

12

そめつけ あん ど むら も ようかくざら  
染付 安堵村模様角皿

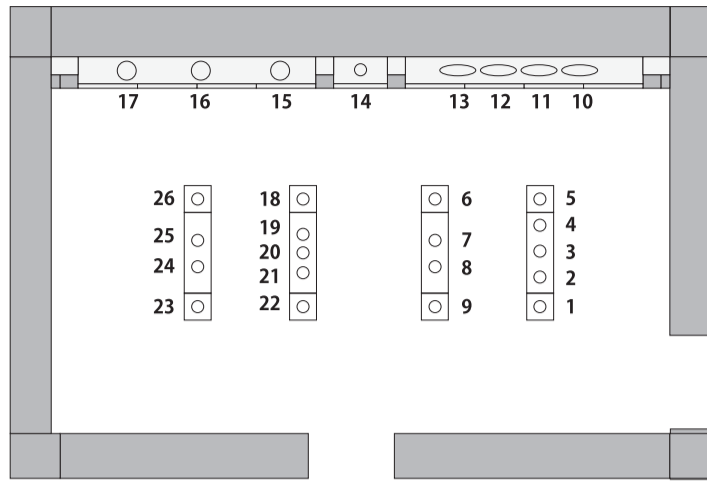
大正9年(1920)銘 8708

型作りで正方形に整形した小皿に、富本自身のスケッチからデザイン化された冬場の安堵村の風景が描かれる。二つの小さな丘には、樹木とともに、安堵では藁棒塔と呼ばれる、刈り取った稲を積み重ねた藁塚が配される。

13

いろ え そめつけ さわあざみも ようさら  
色絵染付 沢薊模様皿

九谷  
昭和11年(1936) 8767



14

はく じ つぽ  
白磁 壺

昭和9年(1934) 8734

富本憲吉は、ろくろで引き上げた壺のうち、最も研ぎ澄まされた造形性を感じる作品を一切の装飾のない白磁に仕上げ、その美しさを人間の裸体の美しさになぞって説明している。本器もそうした美意識のもとに造られた作品。

15

いろ え あかざら さ も ようさら  
色絵 赤更紗模様皿

九谷  
昭和16年(1941) 8771

四弁花模様を連続模様として面として拡大していくと染織の模様と近似した印象を与える。地を赤色にしたこの模様は、富本憲吉が「赤更紗」と命名したもので、同じ模様を手描きした皿を40枚ほど作成したといわれている。

16

いろ え そめつけ さわあざみも ようさら  
色絵染付 沢薊模様皿

九谷  
昭和11年(1936) 8766

昭和11年(1936)富本憲吉は九谷焼の北出塔次郎窯にて色絵の研究を始める。本器は九谷焼の職人達が素焼きした皿の素地に、染付で花が下を向く沢薊を描き、本焼後に上絵付を施し、軽やかで華やかな作品に仕上げている。

17

かきゆうそめつけ とうきび も ようひらばち  
柿釉染付 唐黍模様平鉢

昭和7年(1932) 8764

18

いろ え かい も よう えのぐ すり  
色絵 回模様絵具摺 ほか

昭和18年(1943)銘ほか 8770

19

いろ え そめつけ し べん か も ようおびどめ  
色絵染付 四弁花模様帯留

昭和12年(1937) 8768

20

いろ え そめつけ し べん か も よう  
色絵染付 四弁花模様

ペンダントヘッド  
昭和13年(1938) 8769

21

いろ え ちょうも ようおびどめ  
色絵 蝶模様帯留

昭和24年(1949) 8759

22

こ す めりせんぼり  
呉州塗線彫  
し べん か も ようかくばこ  
四弁花模様角箱

昭和10年(1935) 8765

富本憲吉は、テイカカズラ(定家葛)という花を奈良の安堵から東京の祖師谷に移植していた。四弁花模様は、この花を模様化し、本来は5弁の花であるのを4弁花に変容し、花卉の捻れに変化をつけてデザイン化した。

23

あか え きん さい そめつけ  
赤絵金彩染付  
はな じ も ようかざりざら  
花字模様飾皿

昭和31年(1956) 8777

24

つち やき てつびょうどうさい  
土焼鉄描銅彩  
ふう か せつげつ じ も よう ゆ のみ  
風花雪月字模様湯呑

昭和27年(1952) 8749

25

かきゆういろ え そめつけ  
柿釉色絵染付

えんそうばい か も よう ゆ のみ  
円窓梅花模様湯呑  
昭和16年(1941) 8743

26

そめつけ ちくりんげつ や も ようさら  
染付 竹林月夜模様皿

京都清水  
昭和12年(1937) 8753

富本憲吉は、ろくろで引き上げた壺のうち、最も研ぎ澄まされた造形性を感じる作品を一切の装飾のない白磁に仕上げ、その美しさを人間の裸体の美しさになぞって説明している。本器もそうした美意識のもとに造られた作品。